

け止めたいものです。

一、平成9年度から、全国の小学6年生と中学3年生を対象に実施されている本調査の本来の目的は、児童・生徒の学習状況を把握することによって、国の教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ること、そして、先生方が日頃の学習指導を見直すことにある。したがって、あくまでも、調査結果を先生方の授業改善と我が子の生活実態に対する親御さんの意識変革、町教育委員会の支援の在り方の問題として受け止め、学校及び家庭における児童・生徒一人一人の、その子に応じた学習状況の改善のために活用する。

二、データを用いて、教育を経済学的に分析する「学力の経済学」（中室牧子著）という著書の中で、著者が、「比較できない2つの事柄を比較しても意味がないとき、英語では、『それはリングとオレンジだ。』と表現する。私立校の自由参加（例年、参加校は約半数）や学習塾の有無、家庭環境、親の養育姿勢、地域社会の指導性など、教育資源の異なる児童・生徒集団を比較することは、まさにリングとオレンジである。」と説いている。すなわち、同じ子の、小学6年時の結果と3年後の中学3年時の結果の比較には意味があるが、児童・生徒集団の構成メンバーが違う前年度や他道府県、他市町村との比較は、優劣を比べることのできないリングとオレンジを無理矢理比べるようなものである。――江戸狂歌に、「いづれまけいづれかつをとほととぎすともにはつねの高うきこゆる」（唐衣橘洲）という作がある。「鰹と時鳥、どちらが初夏の訪れを告げる風物詩としてふさわしいか、と比べたがる人がいるが、鰹の初値も、空高く聞こえる時鳥の初音も、高いということでは同じで、勝ち負けはつけられない。」という歌意である。何かと比べたがるのは日本人の国民性……？

三、平均点前後の点数差には、集団としての学力の優劣は認められない、と受け止める。点数差とは、正答数にして1〜2問の違いであるからだ。そして、過去に、そのわずかな点差にこだわるあまり、学校が事前に模擬的なテストを行ったり、テスト監督の教師がテスト中に誤答をそっと指摘したり、さらには、学力の低い児童・生徒を受験させなかったり、という何とも嘆かわしい事例が相次いだからである。

四、多くのメディアが、文部科学省の「学力が高い児童・生徒の特徴は、家庭で読書していること。」という分析をもとに、「家庭で読書している子は学力が高く、家庭読書という原因によって、学力向上という結果が生じる。」といった論調で報ずるが、その因果関係については正確に見極めなければならぬ。確かに家庭で読書している子は高学力の傾向があるが、もとも学力の高い子が家庭で読書している可能性があり、さらに、家庭読書にも学力にも影響する第三の要因（家庭環境・親の生き方・親の養育姿勢・子どもの資質・生活習慣・人間関係・教師との関係・学校及び地域の教育資源など）を分析する必要がある。◇家庭で新聞を読むことや、電子映像メディアの接触時間などの生活状況と学力の関係も、同じ論調で報じられることが多いが、因果関係（Aという原因によって、Bという結果が生じる関係）なのか、それとも、相関関係（AとBが同時に起こっている関係）なのか、を客観的に洞察しなければならぬ。この二つの関係を混同すると、子どもに無意味な負担を強い、その子の学力向上に逆行するケースがあるからだ。

五、日本人は「平均」であることに安心を覚える気質を有する、と言われるが、全員が50点でも平均点は50点で、半数が100点で半数が0点でも平均点は50点であり、同じ平均点でも児童・生徒集団の学力に関する実態や個々の課題は全く異なること、そして、平均点とは全員の中間の点数であり、絶対評価によって全員が学習到達目標に達したと判断できる場合でも、全員が奇跡的に同じ得点でない限り、半数は平均点を下回ることを考慮し、平均点を絶対視しない。

六、学力とは何か、という学力観（定義・解釈）が非常に幅広く、「学力はテストの点数に集約される。したがって、テストの結果が学力である。」という学力観が依然として多い反面、「学力とは、総合的・関連的に思考する力である。」という学力観もある。さらに、「学力とは、単に知識の量ではなく、児童・生徒が、自ら意欲的に学び、他者と関わり合いながら、粘り強く問題解決していく総合的な実践力、すなわち、学習する力である。」など、様々である。◇本調査は、定められた時間内におけるペーパーテストであり、毎年、知識面に偏る傾向が指摘されている。そのため、文部科学省は、基礎的知識と知識活用力を一体的に扱う新形式の出題を検討しているそうだが、今後も、児童・生徒の「生きる力」を育むための学力とは何か、を問い続けていくと同時に、現行の「全国学力調査」の結果は、その子の全学力（全人格？）の一部であることを承知していきたい。